

モデル事業名	漁村体験コミュニティ創生事業
活動団体名	のべおか地域ブランド推進会議
ホームページ	http:// (活動団体のHPのアドレス) http://www.miyazaki-cci.or.jp/nobeoka/blog2/gyoson-taiken/
所属/ 担当者名	日高 誠司 (お問合せ先) 延岡商工会議所 総務課
連絡先	0982-33-6666、nbcci@miyazaki-cci.or.jp
活動地域	みやざきけんのべおかし ととろちよう うらしろちよう しまらちようちく 宮崎県延岡市 土々呂町・浦城町・島浦町地区 ほか

● 活動地域の概要

・地域概況・人口動態

集落人口の推移と高齢化率

・南浦地区(浦城町、須美江町、熊野江町、安井町、島野浦町)の場合

(集落人口) 昭和55年 3,164人 平成21年3月現在 2,174人 (▼31.3%)

(集落高齢化率) 平成21年3月現在 37.1%

・土々呂周辺地区(漁村に面した集落、土々呂町3・4丁目、鯛名町、赤水町)の場合

(集落人口) 昭和55年 2,986人 平成21年3月現在 2,132人 (▼28.6%)

(集落高齢化率) 平成21年3月現在 35.3%

人口減少率は、対S55年度比で南浦地区が31.3%、土々呂地区で28.6%であり、各集落において人口が減少している。また、高齢化率も非常に高い。各集落において過疎化、高齢化が進行している。



・漁業の動向

輸入水産物の増加にともなう漁価安、近海・沿岸の水産資源の減少、高齢化の進行や担い手不足・後継者難など厳しい状況にある。延岡市水産要覧より、域内の漁協組合員数の推移は以下の通り。

(延岡市漁協総組合員数の推移) ※土々呂町・浦城町地区が主な管轄

H1年 351名 → H10年 283名 → H19年 223名 (▼128)

(島浦町漁協組合員数の推移) ※島浦町が管轄

H1年 487名 → H10年 446名 → H19年 336名 (▼151)

両漁協合わせ、H1年に比べ、H19年は279名減と約33.3%減少している。漁業者の高齢化、後継者不足による廃業脱会が主な理由である。

・雇用の状況

厳しい経済情勢を踏まえ、21年11月の延岡市全体の有効求人倍率は0.29倍(同月全国平均0.45倍)と著しく悪化している。

● 活動地域の課題

・集落の衰退による地域産業に対する学び・伝承の場の喪失

当地域における急速な過疎化・高齢化により、郷土文化や人々の知恵・記憶といった地域の財産が失われようとしている。また、延岡市は漁獲高115億円と宮崎県内最大規模の水産都市であるにも関わらず、市民が水産業をはじめとする地域産業への理解を深める場がないのが現状である。

・市町村合併の影響

延岡市は、合併により九州で二番目の面積を持つ都市になったが、行政区の拡がりにより、各地区において住民サービスや、コミュニティ機能の低下防止が課題であり、そのための「新たな公」の取り組みが必要不可欠である。

・高速道路建設の進展

当地域念願の東九州自動車道の供用開始年度が、平成25年(宮崎—延岡間)と平成28年(北九州—延岡間)に迫ってきており、九州横断自動車道延岡線も工事が進むなど、近い将来、高速交通網の整備による産業や雇用への大きな効果が期待される。しかしその半面、域外へと消費や雇用が流出してしまう「ストロー現象」の影響も懸念され、今から地域力を高める取り組みが急務となっている。

・地域間競争の激化、地域格差の拡大

経済のグローバル化に伴い、地方は疲弊してきている。地域活性化に向け、住民・行政・団体・事業者等が柔軟に連携した、持続的な取り組みを行っていかねば、ますます地域間の格差が広がってしまう。

● 活動の内容

・平成21年度

- ① 漁村体験交流事業の実施
- ② 延岡市発祥「大型定置網(日高式)」の活用
- ③ 地場産品を活用した地域特産品の試作と開発

● 活動の成果

・平成21年度

漁村体験交流事業では、地域の新鮮な魚介類を味わうこととあわせて定置網漁の現場見学、魚のさばき方や加工場見学などを体験するツアーを行ったほか、地域の優れた景観を活かした漂着物クラフト体験、地域の住民とふれあえる漁師体験など、ここだけでしかできない体験プログラムの開発に取り組み、参加者アンケートから高い評価を得た。

延岡市発祥の伝統漁法である日高式大型定置網の活用として、延岡市赤水町にある歴史的な古民家、「ぶり大尽」の逸話が残る通称「ぶり御殿」で過ごす「ぶり大尽の浦めぐりツアー」を行ったほか、地元テレビ・ラジオ局などのメディアで取り上げられるなど反響を得た。さらに所有者の企画により「ぶり御殿」で食べる「季節の会席膳」の提供が始まるなど、地域ぐるみでのひろがりを見せている。

特産品開発では、地元事業者2社の参画のもと、地域の新鮮な魚介類を使用した浜料理の開発に取り組み、県産ブランドである一口アワビ「浦の恵み」を使用した新しい海鮮丼の開発などに取り組み。開発にあたっては当地域にスキューバダイビングを目的に訪れるダイバーがモニターとして参加するなど、新しいつながりが生まれている。

また、これら事業の推進を通して、地域で新しいネットワークが生まれており、これまで直接関わりのなかった若手の漁業者、事業者等の参画も生まれ、人材育成につながるなど地域コミュニティの創生につながっている。

(写真・大型定置網漁見学)

(漁師体験)

(ぶり御殿)



● 今後の課題及び展望

・課題

今回の事業を通して、当地域に、県内外にアピールできる優れた地域資源が豊富に存在することが再認識できた。しかし、当地域が交流の受け皿となっていくためには、食事処や宿泊施設の整備、観光ガイドの育成など、まだまだソフト、ハード両面で解決しなければならない課題が多い。

さらに、ツアーやイベント時の集客・宣伝など、地域外とのつながりの構築も欠かすことのできない課題であり、恵まれた地域資源を有効に活用し、地域を活性化していくためには、地域にかかわる行政・企業・住民・団体などがより一体感を持って連携し活動していくことが求められる。

今後も「新たな公」を基調とした取り組みを継続して実施していくことが課題である。

・展望

今回の事業で赤水町「ぶり御殿」をはじめとする漁村地域の資源が注目されたのは大きな収穫であった。今後も地域の魅力を掘り起こし、既存の歴史や自然を活かす「あるもの探し」の地域活性化を目指す。

一方、延岡市浦城町は、テレビ等で「カエルアンコウ」が特集されるなど、ここ数年、九州でも有数のスキューバダイビングスポットとして脚光を浴びており、年間数千人のダイバーが地域に訪れている。

延岡市においても、平成21年に「浦城地区活性化協議会」を設置するなど、ダイビングやマリンスポーツを活かしたまちおこしに取り組もうとしており、今後はこうした地域の取組とも連携しながら、平成28年に予定される東九州自動車道(北九州ー宮崎間)の開通を見据え、域外から訪れてもらえる地域づくりを目指し、モニターツアーや特産品開発など、取り組みを進める検討を行う。